

# 難波西鶴と海之道

【42】

森田 雅也

難波と北海道・東北・北陸などの国々を結ぶ海之道が、西鶴のころに大きな変革を起したことは述べました。その変革とは、西回り航路の開発によって、従来の北陸から敦賀・小浜から琵琶湖へ至るルートが捨てられ、石川から兵庫、鳥取、島根、山口の日本海側を通り、下関を経由して、瀬戸内海航路を通り、大坂に到達するルートを多く利用するようになったことです。西鶴は両方のルートから情報を得ましたが、作品として、北兵庫、鳥取沿岸、島根沿岸の話が非常に少ないことは前回指摘しました。実は、島根の松江の話は結構あるのですが、海之道によるものがどうも分かりません。それに比して、下関を舞台とした西鶴の作品は、いかにも海之道からの情報源によって形成された話ではないかと推察できます。その前に押さえておきたいのは、瀬戸内海の西口、関門海峡です。「関門海峡」とは、『日本歴史地名大系』によれば、「下関市と福岡県北九州市門司区との間の海峡で、東の周防灘と西の響灘を結ぶ。壇之浦と白城山(現在の北九州市門司区)の間は海峡の最狭部で570m、早瀬の瀬戸とよばれ、潮の干満により1日4度流れを變え、潮流8分に達する

## いかにも「海之道」情報源

といわれる。響灘への出口には彦島が横たわり、大瀬戸とよばれる潮の流れの速い海域を形成している。穴戸海峡・馬関海峡・下之関海峡とも称された。(中略)

近世、海上交通の発達により関門海峡を通る船も増加し、瀬戸内筋・西海筋・北国筋の各航路の交錯する地でもあり、沿岸部は入り組み自然の要港となった。さらに関門海峡は当時航海の最大難所で、ほとんどの船が一時停泊するならわしになっていたので寄港地としても宋えてきた。とくに北前船の寄港は下関の経済的發展に至大の貢獻をした。

尾張の商人愛屋平七の「筑紫紀行」に「抑此所は北国西国の通船の津にして、日ごとに入り舟出舟数をしらす、誠に西国第一の大湊なり」とその繁盛ぶりが記されている。また惣嫁(沖女郎・沖惣嫁・浜出女ともいう)といわれる遊女が港内に来往する舟人を相手に營業していた。

以上、引用が長くなりましたが、これでも一部です。日本の海運の中で最も重要なゲートであり、最も長く日本と世界を結んできた地といえるでしょう。江戸時代には船改の番所も置かれた要衝ですが、源平壇之浦合戦の場ともなり、名勝の地でもありました。次回以降話を進めます。

(関西学院大学文学部文学言語学科教授)

# 下関舞台の西鶴作品